

名古屋工業大学



CRAT

コミュニティ創成 教育研究センター



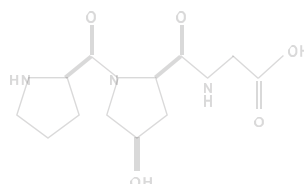
99mTc-HMPAO / 99i
paroxysmal w



コミュニティづくりを、工学で支援する。



2025年度活動報告



コミュニティの「良い在り方」をデザインするには？

名古屋工業大学コミュニティ創成教育研究センター センター長 白松 俊

2020年からのコロナ禍によってコミュニティの在り方が変化しつつあり、オンラインコミュニケーションの重要性がますます高まっています。我々コミュニティ創成教育研究センターは、この過渡的な社会情勢の下で、新たなコミュニティの在り方をデザインしたいと考えています。

地縁に根差した地域コミュニティは言うまでもなく重要ですが、少子高齢化が進む中、地縁だけでは維持できないコミュニティも増えています。「関係人口」を増やして地域文化を継承していくためにも、やはりオンラインの繋がりがますます大事になります。コミュニティに若い人を呼び込もうと思ったらオンライン化やデジタル化は必須ですし、それを口実に若い人に助けてもらう好機と捉えることもできそうです。

例えば、2020年3月にオープンソースコミュニティによって開発された東京都のコロナ対策サイトが、各地の有志によって次々と横展開されましたが、10代の若い世代が中心になって開発された県が複数ありました。そのような行動力を持つ若い人々を応援し、参加してもらえるコミュニティを作ることが、非常に重要になるはずです。

このように、コミュニティにおけるオンライン化やSNS活用は避けて通れないわけですが、現状のSNSは社会を分断したり、偽情報や陰謀論に惑わされるコミュニティが発生したりと、様々な問題点も顕在化しています。このような問題点も踏まえながら次世代のコミュニティの在り方をデザインするには、何を拠り所にするれば良いのでしょうか。

この文章を書いていたら、ヒントになりそうな概念を見つけました。「コミュニティ・ウェルビーイング（communitywell-being）」という概念です。well-being という語は、「良好な状態であること」を意味し、元来は 1948 年の WHO 憲章で初めて使われた単語だそうです。「幸福」「安寧」などの和訳が与えられる場合もあり、身体的・精神的・社会的に良好な状態を指します。その well-beingの前に「コミュニティ」を付けた「コミュニティ・ウェルビーイング」は、以下のように定義されます。「コミュニティ・ウェルビーイングとは、個人とそのコミュニティが繁栄し潜在能力を発揮するために不可欠なものとして認識される、社会的、経済的、環境的、文化的、政治的条件の組み合わせである」[Wiseman and Brasher, 2008: 358]

「じゃあ、その条件の組み合わせって何なんですか」と突っ込みたくなりますが、具体的な条件はコミュニティの価値観によって少しずつ異なるはずです。その条件を話し合い、価値観を共有するプロセスこそが、コミュニティの「良好な状態」を維持するために重要です。ただ、そのような話し合いを支援する技術を開発したり、多くのコミュニティで共通する標準的な指標をデザインすることはできそうです。我々コミュニティ創成教育研究センターでは、最新の工学的知見をうまく使いつつ、コミュニティ・ウェルビーイングを高める仕組みをデザインする試みに取り組んで参ります。

2025年度の活動について

当センターでは、コミュニティの良い在り方を工学的な視点で研究し、地域社会の問題解決に寄与する技術の社会実装を目指しています。2025年度は研究・社会実装、教育、連続セミナー、産学官連携の各領域で事業を展開しました。

研究・社会実証では、名古屋市フィールド活用型先進技術社会実証支援事業において、地域団体を対象に、生成AIによる地域コミュニティ分析レポート評価、議論支援システム、助け合いマッチングの体験プログラムを実施。国土交通省 二地域居住先導的プロジェクトでは、静岡県森町を対象とし、シビックプライド・向社会性・事業評価に関する調査。豊橋市新アリーナ住民投票を題材とした議論シミュレータの社会実験等を行いました。

教育面では、学部「コミュニティと技術」、大学院「コミュニティ創成特論A/B」を継続開講。特論Bでは生成AIを活用した未来予測ワークショップを実施。工学専攻特別講義（知能情報）では金山駅前まちそだて会と連携し、「ローカルハッカー演習：地域課題をAIでハックするPBLの試み」を金山地域をフィールドに開講、発表会では「ストリートミュージシャン動画×駅構内サイネージ連動システム」が金山駅前まちそだて会から高い評価を得ました。その他、コミュニティ工学ワークショップ（第31回）を開催し、主な生活拠点とは別に拠点をもうける二地域居住や移住といった新たなライフスタイルによる、地域コミュニティや個人・地域のウェルビーイングへの影響を議論しました。

コミュニティ工学ワークショップ 2025 年

第 31 回 2025/7/23

人口減少時代のコミュニティデザイン-移住・二地域居住とコミュニティ・ウェルビーイング- 共催：ミテモ株式会社

国全体で人口が減少する中、主な生活拠点とは別に生活拠点をもうける二地域居住や移住といったライフスタイルが注目され、地域との多様な関わり方が提案されている。

都会から地方への移住や二地域居住に焦点をあて、国の政策、現場での取り組み、当事者の声を通じて、移住や二地域居住の現状とその可能性を理解し、地域コミュニティとの関係や個人・地域のウェルビーイングへの影響を多面的に意見交換を行った。

ゲスト 加藤公理 さん・長野県平谷村
(移住コーディネーター)
山口政義さん・福島県檜葉町
(一般社団法人ならはみらい移住促進課係長)
水谷岳史さん(株式会社On-Co 代表取締役)

【全体討議の内容】

移住と二地域居住の相乗効果をテーマに、個人の役割分担や専門性の活用、外部人材による地域活性化、段階的関与を通じた地域愛着の形成について、多角的な視点から意見交換を行った。

【得られた知見】

移住者が地域の担い手、二地域居住者が外部との橋渡し役を担うことで、地域活性化と外部連携の両立が期待できる。

また、段階的な関与を通じて新たな地域愛着やウェルビーイング向上が生まれる可能性が示された。



研究・社会実証活動

名古屋市フィールド活用型先進技術社会実証支援事業

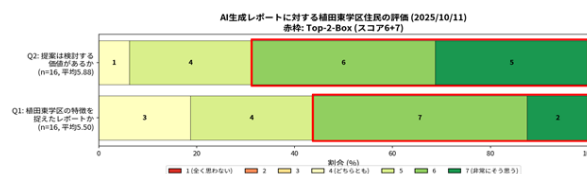
名古屋市フィールド活用型先進技術社会実証支援事業「Hatch Technology NAGOYA 2025」において、地域団体を対象に、①生成AIによる地域コミュニティ調査レポートへの地域住民による有用性評価 ②生成AIを活用した議論支援システム・助け合いマッチングシステムの地域住民による体験と評価 ③価値観を考慮した地域コミュニティ活性化施策の社会シミュレーションによる検証を目的とした実証実験を実施した。

【実証実験の内容】

2025年10月に植田東学区連絡協議会を対象として、HatchMeetsワークショップを開催。前年度に行った「うまくいくコミュニティの性質を探るアンケート」調査結果、AI生成レポートを報告。また、AIによる植田東学区の分析やコミュニティ活性化提案について伝え、住民らがレポートを評価、意見交換を行った。意見交換では議論支援システムによる議論構造化を体験する他、助け合いマッチング助手システムの体験会を実施した。

【成果】

- ①AI生成レポートへの住民評価では、約7割の住民がAIによる提案を「検討する価値がある」と評価。
- ②議論支援システムによりワークショップの住民発言を構造化し、課題と解決策の関係を可視化（議論マップ生成）した。
- ③シミュレーション研究により、多様な価値観が混在する地域（都市部型）では、価値観共有イベントによる「出会いの機会創出」が地域コミュニティ存続に有効という知見を得た。



工学専攻特別講義(知能情報)

【目的】

知能情報分野で研究されているAI等の技術を活用して地域社会の課題を解決する、いわば「地域をハックする」体験を提供する。チームを組んでフィールド調査を行い、問題解決のための技術アイデアを話し合い、大規模言語モデルを活用したプロトタイピングを通じて、実際の社会問題解決に向けたアプローチを学ぶ。

【達成目標】

実社会における技術の応用能力や課題解決能力、チームワークのスキルを高めること。

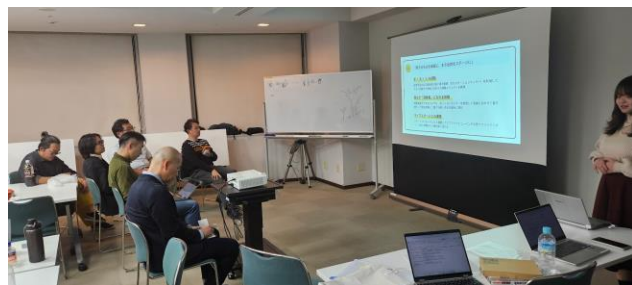
【内容】

金山地域をフィールドとして地域の課題調査と分析を行い、生成AI（GitHub CopilotやChatGPT）を駆使して、地域課題（アスナル金山閉鎖後の賑わい創出、交通拠点から交流拠点への転換等）を題材とした解決のプロトタイプを開発する。最終段階では開発成果を地域関係者に向けてプレゼンテーションしてフィードバックを得る。短期間の集中講義。

DAY0 開発の進め方レクチャー

DAY1

1. イン트로ダクション
2. 現状把握と仮説立案
3. プロBLEMとソリューション探索
4. プロトタイピング
5. ピッチ（プレゼン）・リフレクション



コミュニティ創成特論B

【目的】

人口縮小、超高齢社会を迎えた日本において人と人が繋がり、支えあう生活空間として、コミュニティを再生することが急務となってきた。多様な工学技術は、コミュニティの再生に対して、どのように貢献しうるかを理解することが必要である。このためにコミュニケーションを支援する工学技術者を育成すべく、AIを用いて未来の社会を予測させ、素晴らしいコミュニティが実現された社会とそこに至る経緯を模索する講義を実施する。

【達成目標】

コミュニティと工学技術の関係やコミュニケーションツール、コミュニティ環境に関する工学技術を説明することができるようになる。

【内容】

名古屋工業大学コミュニティ創成教育研究センターのメンバーがオムニバス形式で未来の社会を題材にした話題提供を行う。学生はグループワークにより、未来のコミュニティに与える影響（2040年）について議論し、AIで未来シナリオを生成、コミュニティに関する議論を行う。全8回。最終回は、日本ファシリテーション協会（FAJ）科学技術の社会実装チームと連携し、SFプロトタイピング手法によるまとめを行う。



名古屋工業大学コミュニティ創成教育研究センター

白松 俊（センター長）、小田 亮（副センター長）、五十嵐 康伸、井澤 知旦、伊藤 孝紀、井村 美里、小野地 光弘、川崎 雄二郎、斉藤 祐子、酒向 慎司、浜口 孝司、秀島 栄三、船瀬 新王、三井 実、三矢 勝司、山本 大介、横山 淳一